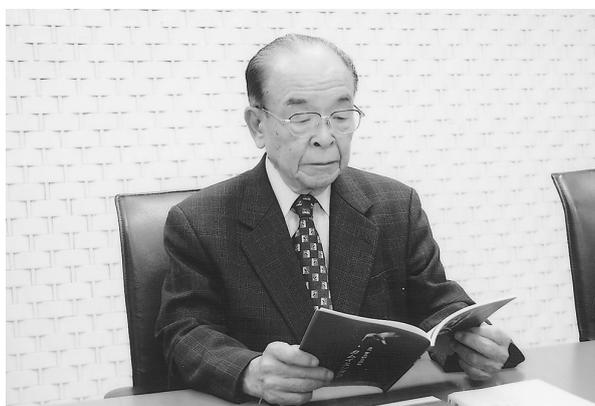


「わが友 倉本聰君との事」

山形商工会議所常議員

大久保 靖彦



人生において良き友人に恵まれているということは実に幸いなことで、おかげさまで私も数多くの友人と交遊している。その中のひとりに作家・脚本家の倉本聰君がいる。テレビドラマ『前略おふくろ様』『6羽のかもめ』『北の国から』など数々の名作を世に送り出し、北海道・富良野を拠点に俳優と脚本家を養成するため私財を投じて演劇塾をつくり、自然塾を立ち上げて森の再生・自然回帰を発信し続けている男だ。

彼との出会いは戦前、東京・池袋の東京第二師範附属国民学校（現学芸大学附属小）に遡る。父親（第13代山形市長大久保傳蔵氏）が、紡織会社東洋モスリンに職を得ていた関係で私は東京で生まれ育った。そこで山谷馨（やまや・かおる、倉本氏の本名）と机を並べることとなった。ぐっと近くなったのは昭和19、20年の学童集団疎開。4、5年生約100人が上山の月岡ホテルに宿泊し地元の小学校に通った。その時の体験を基に彼は、『失われた時の流れを』という学童疎開のドラマを作ったが、もう一つ、東京・下町を舞台に青年板前と、周囲の人々

との触れ合いを描いた青春ドラマ『前略おふくろ様』（昭和50年から52年）の主人公の出身地が上山市蔵王と設定された。ショーケン演じる主人公が、真冬の蔵王で母親を野辺送りするシーンを覚えている方も多いと思う。ちなみに登場人物の名前は全て私の会社の社員の名前だ。

実は放映の数日前におふくろ様役の名女優田中絹代さんが亡くなった。彼自身、田中さんの状態が思わしくないことを知っていた。「何というドラマを書いたのだと思った。どうしてあの台本を破棄しなかったのかと僕は悔やんだ」「ドラマの中でおふくろ様の死を設定したことが名女優の死期を早めた」と自分を責めていた。

国民学校を出て、私は開成から中央大学の法学部に進み卒業後、父の生まれ故郷山形でロープウエー建設の仕事をはじめた。学生時代から勉強そっちのけで蔵王通いしスキー三昧だった私には天職みたいなものだった。彼は麻布から東大文学部、放送会社を経て脚本家となった。共通するのはスキー。ドラマで名が売れるようになってからも、冬には必ず蔵王に来て私が経営する「トドマツフツテ」に泊まった。八千草薫、桃井かおり、仁科明子といった女優を連れて来た。岡本太郎も常連で、2人は真剣に芸術論議を交わし、時にふざけてプロレスごっこなんかやって彼はろっ骨を折ったことがある。

とにかく思い込んだら一途な男で、NHK大河ドラマ『勝海舟』の脚本を書いていた時には現場のありように憤慨、そのまま札幌に行ってしまうほど。一時は札幌でトラックの運転手になるかと思ったようだ。北海道に移り住み、そこで多く市井の人たちと交遊を結んだ。そして『北の国から』が誕生した。登場人物の多くは、彼が知り合ったユニークな人々がモデルとなっている。

今、彼は麻布の同級生・元西武鉄道堤義明氏の縁により、閉鎖された富良野のゴルフコースを元の森に返す植樹運動を展開している。福島原発被災地に足を踏み入れ、廃墟の町をルポし季刊誌に発表している。私にはこれまで私の仕事を理解し叱咤激励してくれた多くの先輩、仲間がいる。同時に反骨精神と理想を追い求める「やまや」（いつも私はそう呼んでいる）の姿に励まされてきた。

若い人たちにお願いしたい。「良き友を見つけること。時に挫折もあるが自分の一生を掛ける仕事を見つけること。そうしてハッピーな人生を」である。

蔵王ロープウェイ(株)相談役